スペインの社会と言語——今日のカスティーリャ語の姿

江　澤　照　美

1．はじめに

スペインは、カスティーリャ語(スペイン語)を国家の公用語とし、カスティーリャ語以外の固有の言語が話される国内の自治州においてはその言語もまたその地域における公用語として使用する権利を憲法で保障している国である。多言語国家である上に、近年急増している移民の流入により、国内の言語事情はますます複雑な様相を呈している。外来語を含む新語が出現する一方で、次第に使われなくなったり死語になったりする表現も出てくるのはこの国に限った現象ではないが、日に日に変化し多様化する言語表現を前にして、母国語話者ですら混乱して、文字表記や発話の際に無意識のうちに誤りを犯してしまうことがある。

言語の規範から逸脱した誤用が増加する傾向にある現状を憂慮して、王立言語アカデミアや言語学者、文学者、ジャーナリスト等の言語の専門家や識者たちは辞書や文法書、もしくは正しい言葉遣いを世の人々に奨励するための言語の実用書や啓蒙書を数多く出版し、また、一般大衆にとってもそのような一連の書物は正確な言葉を使用するにあたっての判断の拠り所となっている。

現代カスティーリャ語に要求されている規範の全体像を把握するために、江澤(2004)は言語アカデミアの業績や主要マスコミ・識者が出版したスタイルブックや言語学的啓蒙書の内容やその意図を概観した。近年特に言語関係のこの種の書物の出版が増加しているという事実は、カスティーリャ語圏において、言語の規範確立の必要性がこれまでになく高まり求められていることや言語をめぐる諸問題に深い関心を寄せる人々が増えてきたことを物語る。

江澤(2004)では、規範を定め、言語に関する啓蒙書を世に問う言語の権威機関及び識者たちと彼らが示す規範を考察の中心に据えた。そして、その続編となる今回の小論においては、教育や書物を介して規範に沿った表現を教わるスペインの一般大衆に目を向け、現実生活における彼らの言語

行動を主な研究対象とする。学校教育を受けた者ならば誰しも言語の規範は守らねばならないものであることを自覚しているはずであるが、人間は実生活において必ずしも規範に沿った言葉遣いをしているわけではなく、無意識のうちに、あるいは意図的に、規範を無視した言語表現を使用し、他者が用いる同様の逸脱表現を咎めることなく容認している。このような一般の人々の言語の規範に対する態度が意味するものについて本稿は考察していきたい。

規範的な性格の書物ではとかく目の敵にされがちなのがいわゆる「外来語」[1)]やそれらを含む新語全般である。言語アカデミアの辞書に見出し語として採用されるのは一般大衆が使用する新語の語彙のうちのごく一部にとどまるのが常である。

しかし、言語の権威機関や識者たちの判断に関知せず、一般大衆はもっと自由に新語を日常生活の中で使用していて、しかも世代や性別、社会階層などの違いによって一般大衆の間でも各表現の容認度に差異がある。

また、新しい語の出現はそれが生まれた当時の世相を色濃く反映するものであるので、その分析にあたっては単に言語現象を羅列するだけではなく、当時の社会状況がどのようなものであったか、そして、それが人々の言語生活にいかなる影響を及ぼし、新しい語彙や表現の出現に至ったかを概観する必要がある。よって、本稿でも社会と言語の関わりを常に意識して一般大衆の規範に対する考え方や態度を捉えていく。

なお、本稿が研究の対象とする主要な時期はスペイン国内で様々な変化が見られた1990年代から現在(2004年)までである。1992年にバルセロナで開催された夏季五輪とセビーリャでの半年間の万国博覧会の開催準備が始まった1990年初頭からのスペイン社会の変化は劇的なものであり、その変化は国内の言語問題にも多大な課題を与えた。

次章では現代スペインの社会動向とそれが生み出したものに言及しつつ、近年の国内の変化により今後一層の増大が予想される、スペインのカスティーリャ語以外の言語からの影響について論じる。さらに続く章では規範を逸脱した言語表現の実態について考察する。

2．近年のスペイン社会の動向と言語問題

2.1. 移民問題

近年スペインの特に大都市に顕著であるのは国外からの移民の増加である。海を渡ってアフリカ大陸からスペインに不法入国を試みる人々に関するニュースは近年しばしばマスコミで報じられているが、移民とはそのような人たちばかりではない。彼らの多くは中南米やアフリカ、アジアから来ている。

1990年代初頭には五輪や万博開催の準備のため当時在住していた多くの移民が仕事の機会を与えられた。そして、この大規模な二大イベントの終了後、スペインは深刻な不況に見舞われたが、90年代半ばに政権がPSOEからPPに移行し、以後経済状況は徐々に回復してきた。そんな中で移民の数は増えていき、彼らの雇用問題が近年スペインの抱える大きな社会問題となっている。

移民問題は雇用に関することだけにとどまらない。社会的弱者である彼らは同じエリアに固まって居住していることが多いが、文化や習慣の違いが原因で、周辺のスペイン人の住民とトラブルを起こすこともある。また、スペインの外国人法は頻繁に改正されて人々の混乱を招いている。このように移民問題は現在のスペインが早期解決を迫られている大きな課題の一つである。

しかし、移民の増加は必ずしもスペイン社会に暗い話題を提供しているだけではない。スペイン人とは異なる文化・習慣を持つ移民たちが多く居住する地域には彼らの国の料理を提供するレストランや独自の文化を享受できる娯楽の場が増え、それに興味を持ち始めたスペイン人たちとの交流が盛んになることにより、結果としてスペイン人の異文化理解を促進している。

もちろん、従来のスペイン人が外国文化に著しく理解が欠けていたわけではないが、例えば食文化に関してはスペイン人は比較的保守的である。そのため、スペイン人でにぎわう外国料理のレストランというのは都会でもその数は限定されていた。しかし、近年移民が多く暮らすエリアに彼らの祖国の味を提供するレストランが次々と出現し、スペイン人の来客も目立って増えてきた。最近の健康志向の高まりゆえであろうか、アジアや中東の食材を使った料理は、従来肉食中心の食生活を送っていた多くのスペ

イン人にとって健康を保つのに適切なものとみなされているようだ。自然食品の店やスーパーマーケット等のダイエット食品コーナーの充実度や健康をテーマにした様々な雑誌の出版からもこのようなスペイン人の嗜好の変化が実感できる。

以上のように、移民の増加はスペインの社会や文化に変化を与えた。そして、同時に移民たちの言語から新しい表現がカスティーリャ語にもたらされることにもなった。移民の言語は、中南米のカスティーリャ語とそれ以外の国々で使用されるカスティーリャ語以外の言語とに大別される。前者に由来する語彙や表現は言語的には外来語と呼び難く、スペイン国内の方言的用法(ただし、地方語ではない)と中南米の語彙をまとめた辞典である Grosschmid y Echegoyen(1998)が呼ぶところの regionalismos に相当するが、後者に由来するのは一般に外来語と呼ばれるものである[2)]。

現在の中南米移民がもたらした語彙の今後の定着度は注目に値する。移民が急増する以前の時代には、中南米の regionalismos とは専ら中南米で使用される表現を指し、スペインでの使用やその定着度については必ずしも考慮されたものではなかったが、現在の regionalismos はその使用者自身がスペイン人と共存しているだけに、移民たちによってもたらされる言語上の影響は従来よりもずっと大きいかもしれない。ただし、中南米からの移民たちがスペインに住むうちにその固有の表現を捨て、スペインで使用されている語彙に慣れる可能性もありうる。

コロンビアの El tiempo 紙のウエブサイト上にスペイン在住の移民向けのページ "Colombianos en España" があるが、このページの中に、コロンビアとスペインでは意味がやや異なっていたり、一方の国では普通に使うが他方の国では使わない語彙を集めてウエブ辞書の形態にまとめたものが置かれている[3)]。

同様のウエブページが他のカスティーリャ語圏でも充実すれば、中南米移民固有の表現の全体像が今後徐々に見えてくるであろう。中南米独特の語彙は辞書にあたることによっても知ることができるが、このようなウエブ上の語彙集は更新さえされれば紙の辞書よりも生きのいい情報を私たちに提供してくれる。

中南米移民より少ないアフリカや中東、アジアの移民たちからもたらされる言語的影響については、残念ながら筆者はまだ十分な知識を得ていないが、文字に関しては、近年、漢字が異国趣味を呼び起こし、特にデザイ

ンやインテリアの分野で静かなブームを呼んでいることをここ数年の現地訪問で確認している。

スペインの一般人の移民に対する見方も移民の言語からの借用語の定着に影響を与えることであろう。政府の移民政策が頻繁に変更され、法律が改正を繰り返される中で、スペイン人の移民に対する感情もまた微妙に変化する。その感情がよい方向に向かえば、中南米やその他の国々の文化の受容が進み、スペイン人はより多くの新しい借用語に触れることになるが、悪い方向に向かえば、移民排斥の動きが出たり、彼らに対して否定的な意味を持つ語彙が使われたりすることになる[4)]。

移民たちを取り巻く状況が一定しているとは言い難いために、彼らの言語由来の語彙や表現が現在のカスティーリャ語にどのくらい浸透しているのかその現状を見定めるのは容易なことではない。また、スペイン人の異文化許容度は個人差があり、ある分野では異文化のものを享受するが、別の分野では全く受け付けないということもある。移民を排斥する人々もいる一方で、文化の異なる地域から養子をもらう人々の数も増えているのがスペインである。移民に関する状況は今後も変化しうるため、また比較的短い期間に移民が急増したという特殊な事情もあり、スペイン在住の移民の言語がカスティーリャ語に与えた影響について明白な結論を出すにはまだ多くの時間を必要としている。

2004年8月23日付のEl País紙の記事によると、移民の子供の出生率が高いために、スペイン全体で出生率がわずかではあるが上昇した。2002年から2003年にかけてスペイン人の出生率は約10%増加したが、同じ時期に移民の出生率の増加は約350%に達し、その結果スペインの家族の平均的な子供の数は2002年の1.25人であったのが2003年は若干増えて1.29人となった[5)]。このような形で国内の移民人口が増加することによって、今後スペインの移民政策や教育制度、あるいは社会全体に様々な影響が出てくることが予想されるが、それは同時に移民文化や借用語流入の促進をも意味することになるであろう。

2.2. バイリンガル地域

カスティーリャ語と固有の地方語の両方を公用語としているバイリンガル地域は1990年代に入って地方語の使用が80年代以上に奨励された。各自治州政府が積極的に推進した言語政策により、初等教育段階から地方語で

の授業を実施した成果が現れ、地方語は徐々に各地において復権の道を辿ってきた。

ただし、言語正常化運動の進捗度には地域差があり、中央政府への対抗意識を強く持つカタルーニャ地方は時に急進的とまで言えるほど積極的に地方語教育を推進しているが、ガリシア地方の地方語復権の動きは比較的穏健であり、バスク語はその習得の困難さが復権の足枷となっている。

また、地方語普及のペースは分野によっても様相を異にする。今や地方語版のTV放送や新聞を現地で目にするのは当たり前のことになっているが、地方語メディアの多くは90年代になって出揃ったものである。つまり、80年代のスペインはまだTV番組そのものに選択の余地が少なく、マスコミは90年代、国内の大きな変化と共に発達してきた。また、世の中の価値観が多様化していく中でマスコミ各社が表現に気を配り、その姿勢をスタイルブック出版の形で競って示すようになったのも比較的近年のことである[6)]。

もちろん、地方語版の映画上映のように、各地で実施されてはいるがその上映館数があまり伸びず、まだまだ地方語優勢とは言い難い分野もある。例えば、地方語優先の姿勢が顕著に見えるカタルーニャ地方でさえ、映画館の数が多いバルセロナにおいて過半数の映画館がカスティーリャ語の映画を上映している。2004年9月8日付La Vanguardia紙の映画欄によると、その日バルセロナで上映していたカタルーニャ語の映画の作品数はわずか20の映画館で8本であった。ちなみに同日にバルセロナよりもカタルーニャ語を街頭で耳にする頻度が高い他の地域では67の映画館で4本のカタルーニャ映画が上映されている。一方、カスティーリャ語版の作品は36の映画館で279本上映されている[7)]。

出版物も地方語版よりはカスティーリャ語版のほうが優勢である。各自治州では地方語での出版物を扱う書店があるが、全体的には地方語の出版マーケットはまだまだ小さく、地方語とカスティーリャ語の両方で出版されても地方語版の本の価格の方が少し高めであったり、カスティーリャ語版しか存在しないというケースがある[8)]。

映画制作や出版の場合、スペイン全国だけでなく、中南米のマーケットでも流通可能なカスティーリャ語版が最初に作られるのは採算を考えれば納得がいく。そこからさらに地方語版を制作するには相当の需要が見込まれる場合に限られるであろう。スペインでも人気のある日本のアニメの映

画作品は地方語版でも制作されているし、TVでも地方語版で放映されている[9]。

このように、地方語復権の動きは地域や分野によってその進度に差があるものの、各自治州政府が言語正常化のための努力を続け、その成果が出ていることは周知の事実である。

以上の事柄をふまえて、地方語からカスティーリャ語に流入した語彙や表現がカスティーリャ語圏でどのように扱われているかを見てみる。

まず、現代カスティーリャ語でどの程度地方語起源の語彙が定着しているのかその実情を知るのは、先述した移民の言語起源の語彙の定着度を知ることと同様に、容易なことではない。カスティーリャ語話者はバイリンガル地域も含めてスペイン全国にいて、地方語圏在住のカスティーリャ語話者の間では当然その地方語起源の語が認知され、使用される確率が高いと思われるが、それ以外の地域、つまりカスティーリャ語のモノリンガル地域では、地方語起源の語の認知度は地方語圏におけるよりも低くなると思われるからである。

わずかに参考になるデータとしては、江澤(1999)で言及したDoval(1996)の外来語辞典に収録されていた地方語の語彙リストである。この中でバスク語・カタルーニャ語・ガリシア語は辞書の見出し語の上位にランク入りしている。もちろん、その用例数が全体に占める割合は少ないが、各言語圏固有の風物や現象などの語彙が多くを占めている[10]。

しかし、そのような語彙は地方語圏をテーマとしたテクストや談話中にしか出現しないのが普通である。従ってその使用は局地的である。それでも、地方語圏でその語彙が生き残る限り、カスティーリャ語のモノリンガル地域でも同様に廃れず認知される可能性が高い。また、カスティーリャ語の語彙に似た綴りの地方語の語彙は、まるでカスティーリャ語の新語であるかのように解釈されて使用されるようになるかもしれない[11]。

このように、カスティーリャ語のモノリンガル地域の人々の言語生活に地方語起源の語彙は少しずつではあるが徐々に浸透しつつあるようだ。しかし、このことはモノリンガル地域の人々とバイリンガル地域の人々の相互理解に結びついているのであろうか。スペイン人のプロトタイプとして強い郷土愛を持つ人が多いことがしばしば文化論の中で指摘されるが、また同時に他地方のことに無知であったり無関心な人も少なくないことをスペイン人とのつきあいの中でしばしば気づかされる。

筆者の乏しい経験でも、バイリンガル地域、特に地方語復権の動きが顕著なカタルーニャ地方に滞在中、新聞などのメディアを通して言語問題を扱った記事に数多く接してきたが、他方で、同時期にカスティーリャ語モノリンガル地域に滞在中、同じく新聞などでこの種の問題を取り扱った記事に遭遇することがあまりないのが常であった。スタイルブックで地方語固有の風物を表す語彙の綴り尊重を謳っているマスコミですらモノリンガル地域ではこのような姿勢を取っているので、同地域の一般大衆にとっても地方語の語彙や表現の存在はあまり身近なものではなく、関心が薄くなる傾向があるのかもしれない。

ここで、言語の規範を示す立場の人々が地方語に対して取る態度に注目してみると、Lechuga Quijada(1996)がカスティーリャ語としては問題のある用法の一つとして地方語の用法をあげていて、地方語もスペイン国外から入ってくる語法と同じ扱いを受けているように思われる。しかし、カタルーニャ語やガリシア語に影響を受けた例[12]として指摘されているものの多くはカスティーリャ語と地方語のシンタクス及び語彙選択の違いがその要因となっていて[13]、地方語固有の語彙のカスティーリャ語への導入はLechuga Quijada(1996)でも問題視されていない。カスティーリャ語メディアのスタイルブックも地方語の綴りを尊重する姿勢を示していることとあわせて考えると、言語の規範を一般大衆に示す立場の人々も、地方語圏の固有の文化を尊重するがゆえに地方語独自の語彙をカスティーリャ語の中に取り込むことは容認するが、母語である地方語の干渉によってバイリンガル話者が文法上正しくないカスティーリャ語を生成することは問題視するというスタンスを取っているように見受けられる。

そして、地方語圏在住の一般のカスティーリャ語話者は、カスティーリャ語のモノリンガル地域の人々よりこの種の誤用を含みうるカスティーリャ語を耳にする機会が多いので、地方語の干渉が入った表現に対する許容度が高いのではないかと思われる。

まだ資料や調査が不十分であるがゆえに、筆者はカスティーリャ語に借用される地方語起源の表現に対する一般大衆の考え方については十分論じることができないが、今後この点について考察を進めていく上で参考になると思えるのが、カタルーニャ語話者をめぐる最近のある言語事情の報道である。以下、その詳細を紹介する。

2003年6月4日付のLa Vanguardia紙によると、カタルーニャ州全域

の52の小学校の６年生が休憩時間に級友との間で主に使う言語を調査したところ、カスティーリャ語を使用する生徒60%、カタルーニャ語を使用する生徒34%、態度を決めない生徒５%，両言語を交互に使用する生徒１%という結果が出たことがバルセロナ大学の二人の教師の研究発表により明らかにされた。また、家庭でもカタルーニャ語が母語の生徒の48.8%が会話で主に使うのはカスティーリャ語であると答えた[14]。現在のカタルーニャの小学生は母語のカタルーニャ語による教育を義務的に受けている世代であるが、それだけにこの現状報告とデータは非常に興味深い。

カタルーニャ自治州は言語政策を積極的に進めているため、特に現在の若い世代にはカタルーニャ語教育が十分浸透しているはずである。にもかかわらずこの世代の子供の会話の中でカスティーリャ語が優勢であるということは、自治州がとってきた言語政策についてその理想と現実に大きなギャップが存在することを示している。なぜカタルーニャの子供たちが仲間内で話す時にカスティーリャ語を選択するのか。

カタルーニャ人をよく知る筆者の知人によると、大人のカタルーニャ人はこちらがカタルーニャ語で話しかけても対話の相手がカタルーニャ人でないと気づいた途端にカスティーリャ語に切り替えてしまう傾向があるという[15]。若い頃にカスティーリャ語使用を強制された世代の行動としては納得できるものがあるが、子供の頃から当然の権利としてカタルーニャ語教育を受けている子供たちにさえそれが受け継がれているのであろうか。先述した地方語話者ではない移民やその子供たちがカタルーニャに多く居住していることもカタルーニャの子供たちの言語選択に影響を及ぼしていると考えられる。このようなカタルーニャ人の言語使用に関する現実は、権威機関がその言語での教育を積極的に推進しても、結局のところ、一般の人々は彼らなりの考え方でもって言語使用の際の態度を決定することを意味している。

バイリンガル地域でバイリンガル話者がカスティーリャ語のモノリンガル話者の使用言語にあわせてくれる傾向があるならば、その分だけ当地在住のカスティーリャ語モノリンガル話者による地方語理解は阻害される。そして、地方語圏ですらこのような現状があるならば、カスティーリャ語モノリンガル地域の人々による地方語圏の言語への理解はなおさら進まないままであり続けることが予想される。

3. 今どきのカスティーリャ語

前章では多言語国家スペインの現状について社会の動向に沿って概観したが、本章では一般の人々による誤用などの具体的な実態を観察し、その有り様について考察する。

3.1. 誤用の実態

言語の規範を示す立場の人々が啓蒙的な書物の出版を通じてカスティーリャ語をめぐる憂慮すべき現状を具体的に提示することにより、読者である一般の人々は現在問題視されている誤用や表現上十分留意すべき点について知識を得ることができる。その問題点は後述するように音声・音韻その他言語学上のあらゆる面について指摘されているが、完璧な知識を有する人でさえ、ある条件下で意図せずに言い間違いをしてしまうことはありうる。しかし、そのような偶発的誤用は考慮の外に置くとして、現在のカスティーリャ語で問題になる頻度が比較的高い誤用とはどのようなものであろうか。

その疑問に答えるための手がかりを与えてくれるのがBosque y Demonte (dir.)(1999)、すなわち『スペイン語記述文法』である。数多くの専門家がカスティーリャ語の現実社会での使われ方をシンタクスや形態論、ディスコースなど複数の観点から記述したこの全3巻の大著は全部で78の章から構成されるが、規範に関する書物の中で俎上に載せられることの多い表現に同書の一章が割かれているケースが二例ある。それは第21章の "Leísmo, laísmo y loísmo" (Fernández-Ordóñez (1999))と第34章の "La variación en las subordinadas sustantivas:Dequeísmo y queísmo"(Gómez Torrego(1999))である。もちろん、その他の章でも現在多く観察される誤用について言及されているが、この弱形人称代名詞の使い分けと dequeísmo, queísmo の語法はそれについて記述するだけで一つの章にまとめられるほど、現代カスティーリャ語にとって大きな問題であると理解できる。事実、世に出回っているたいていの規範的書物にはこの二つの語法への言及がある。

弱形人称代名詞に関する判断の揺れや dequeísmo, queísmo は比較的最近になって生じた現象というわけではない[16]。しかし、前者は Fernández-Ordóñez(1999)の詳細な報告に見られるように、スペイン国内や中南米諸

国で相当の幅広い地域バリエーションがあることで知られ、後者はGómez Torrego(1999)によると地方語話者がカスティーリャ語を話す時に過剰訂正により生じたり、南米で発生したという説が存在したり、スペインより中南米により多く観察されるという諸家の一致した見解が示されたりしている[17]。このことを前章で言及した中南米からの移民の増加や国内の地方語復権の動きと合わせて考えてみると、スペイン国内の社会状況の変化は、以前から生じていた言語現象が近年になって顕著化した一因として考えられているように思われる。

弱形人称代名詞に関する記述中、Fernández-Ordóñez(1999：1387)は言語アカデミアの功績について言及している。17,18世紀には人間ではないものをも指示していたleは19世紀より文学作品の中での使用が減少し、人間を指す男性名詞に対してのみ使われるようになったが、これは言語アカデミアの姿勢に依るところが大きいということである。このように、言語アカデミアのような権威機関の指針とは、一般人がすぐにそれに反応を示すものではないが、時間の経過と共に少しずつ浸透するものなのであろう。

また、もう一つの頻出する語法Dequeísmoが生じる原因について、Goméz Torrego(1999)は類推や言語外要因など複数の説を紹介しているが、その原因の一つとしてスペイン国内のバイリンガル地域で地方語による過剰訂正が生じる可能性を指摘したり、この語法が中南米で生じたという説が存在することや誤用をする人々の社会階層や世代にも言及し、全体像を解明するために社会学的側面から問題を捉える必要性があることを示唆している。話者の社会階層や言語環境が語彙選択の揺れの一因になりうるという見解は上述のFernández-Ordóñez(1999)にも見い出される。

以上に指摘した弱形人称代名詞の使い分けとdequeísmo, queísmoの他にも現在使われているカスティーリャ語には多くの誤用が存在するが、その実態について豊富な例と共にそれを分析しているのがRozalén y Calvo(1999)である。主にマスメディアで90年代の間に実際に使用された音声・音韻・語彙・意味・形態統語面や正書法上の誤用や好ましくない表現を指摘したものである。その内容を瞥見すると、上述の弱形人称代名詞やdequeísmo, queísmoの例はもちろん含まれている上に、言語学上のあらゆる面にわたって誤用や不適切な表現が見いだされていることに気づく。また、問題視される表現は結局規範を示す大抵の啓蒙書が指摘しているもの

とほぼ同様のもの、例えば方言的な用法や語彙の乏しさ、借用語の使用、そして文法的に間違いと考えられている表現である。以下、同書より一部の例を抜粋する。

- 母音間の子音 d の欠落または省略

  Tele 5. Noticias : "Hoy le ha tocao el turno al partido..." [18]

  (正しくは "...ha tocado...")

- オールマイティの動詞 hacer, dar などの使用

  El Mundo (Magazine) : "Los monjes dan misa todos los domingos" [19]

  ("...celebran misa..." が望ましい)

- 不必要な分析的表現や付け足し表現による総合的な形態への置き換え

  Tele 5. Fútbol : "El Sevilla puede ganar lo que es el trofeo más carismático de la ciudad hispalense" [20]

  (..."el trofeo más representativo..." が望ましい)

- 借用語

  RNE : "La primera razón por la que España no puede ganar es el handicap" [21]

  (正しくは "la dificultad", "el problema", "el obstáculo")

- laísmo

  Canal Plus. El Día Después. Lobo Carrasco. Presentador : "La pega de cine" [22]

  (正しくは "...le pega...")

- dequeísmo

  Onda Cero. Tertuliano notable : "Yo entiendo de que..." [23]

  (正しくは "...entiendo que...")

- 正書法上の誤用

  TVE. 2ª Cadena. Gala de Reyes. Rótulo : "Aquél que por tí llora..." [24]

  (正しくは "...por ti...")

Rozalén y Calvo(1999)には、偶発的な言い誤りや書き間違いの修正漏れのような、発話者または文を書いた者が意図的に表出したとは解釈しがたい用例も多く見られるが、それ以外に、品位のない表現や遠回しな言い方も不適切な表現として指摘している。マスメディアが一般大衆に与える

影響は大きいので、品位のない表現が使用の望ましくない例として挙げられるのは理解できる。

しかし、使用範囲が広い **hacer, dar** のような基本動詞の使用に対して語彙の貧困さを指摘する一方で、少し凝った表現の使用も問題にするというのは矛盾した態度であると筆者には思える。これは規範を示す啓蒙書にありがちな態度であり、誤用ではないが代替表現を使うことが望ましい表現とはどのようなものを指すのかその定義を万人に納得されるように示すのは非常に難しいことである。

ところで、このような啓蒙書による矛盾した指摘を通して、自ら他の人々に言語の規範を示す能力をあまり持たない人々の日常の言語生活も垣間見えてくる。マスメディアに露出するような人々であっても、時として語彙の貧しさを露呈し、また時として難易度の高い表現を使おうと試みてかえって分かりにくい文章を作ったり、言い間違いをしてしまうのである。そのような人々も他人の言い間違いや書き間違いに気づき、指摘することもあれば、そうでない場合もある。結局のところ、一般の人々の言語規範に対する態度はその時代の言語規範を示す書物が指摘するものに反映されている。規範を意図的にもしくは知らずに無視したり、あるいは豊かな表現や凝った表現を意図しながらそれが成功せず、望ましくない表現と見なされてしまうのである。

3.2. 若者言葉

言語の規範に通じた識者であっても偶発的な誤用を犯す可能性があるぐらいなので、一般大衆においてはなおのこと規範を外れた表現をしてしまいがちである。また、一般大衆の中でも若年層の人間は、それより上の年齢層の大人に比べて規範に従わない表現を口にしたり、書いたりすることが多いものである。このような規範外の表現が出てくるのは、上述のように、意図的な規範無視や勉強不足による無知から生じるものであり、若者の言葉遣いは一般的に年長者、特に規範遵守を心がける人たちの批判の対象となりやすい。

スペインの若者言葉については、Rodríguez (coor.) (2002) の論文集が詳しいが、同書巻末の Bibliografía を一覧すると、このテーマは新聞や雑誌などでしばしば取り上げられることはあるものの、研究論文の形での報告が比較的少ないのが特徴であることがわかる。スペインに限らず、若い世

代はどちらかと言えば言語の規範を守らず、新しい言葉にすぐ飛びつき、またそれに飽きるのも早いというイメージを持たれる傾向があるが、そんな若者たちの言語に対する態度や彼らの作り出す新語の短命さゆえに、従来の研究者にとって若者言葉はあまり重要度の高くない研究テーマであると解釈されがちであった。Zimmermann(2002)によると、社会でマージナルな存在と見なされている若者たちはその社会で一人前扱いされず、また彼らが生み出す新語の多くは記述に価するものとは見なされていなかったが、近年言語と社会の関係への注目が高まるにつれて若者言葉の研究も少しずつ増え始めた。

Rodríguez(coor.)(2002)に収録されている論文のテーマはどれも興味深いが、特に、スペインでpijo, pijaと呼ばれる上流家庭の子息の言葉遣いについて論じたVigara Tauste(2002)はまずその呼称の起源やそう呼ばれる若者を取り巻く社会環境について論じたあとで、彼らの生態を詳しく紹介している。彼らの態度は親の生活態度をある程度反映するようで、性別により多少の違いはあるが言葉遣いも身振りも全般的に抑制気味であるとVigara Tauste(2002：219－224)は判断している。

通常、若者は社会的な立場が弱く、彼らの言語はそんな彼らの状況を反映してか下層階級の言葉つまり卑語や俗語と結びつけて論じられることが多いが、下層階級が日常的に経験する世界とは疎遠な場所にいるpijo, pijaたちの場合、例えばvulgarismoの使用を避け、婉曲的な表現に置き換えるなど[25]、その言語生活も世間一般の若者とはやや異なったものになる。

Vigara Tauste(2002)の指摘した数々の用例を観察すると、pijo, pija独自の表現は存在するものの、全般的には、社会的弱者である若者がしばしば放つパンチの効いた表現が彼らの語彙には乏しいような印象を受けた。総じて世間的に「良い子」と見られがちなpijo, pijaであるがゆえに、規範的なものへの反抗心・対抗心を感じさせるような造語をつくる感性に乏しいように見える。

3.3. ネットの世界と言語

性別・年齢・階層などの違いにより、若者たちもその集団ごとに異なる語彙を持つが、彼らの社会的な諸条件の差異を超越して、現在の多くの若者たちと関わりがあると考えられる言語現象について彼らの日常表現を観察してみる。ここで取り上げるのは、近年新語を絶え間なしに生産し続け

ているコンピュータやネットの世界において発明された彼らの「言語」である。

1990年代はインターネットが短期間のうちに全世界的に普及して、我々の生活に劇的な変化をもたらした時代である。スペインにももちろんその変化の波は押し寄せてきて、多くの機関、企業、団体がウエブページを開設したことで、今や日本国内にいながらにしてスペインの新聞が購読でき、e－mailの普及によりスペインのホテルの部屋や鉄道の便の予約まで可能になった。また、オンラインでチャットすることで、バーチャルな世界の中ではあるがリアルタイムでスペインにいる人々と交流することさえ行われている。

スペインにおけるネット社会の発展と共に英語起源のネット用語がカスティーリャ語に大量に流入してきた。chatのように英語の綴りを保持したまま現在も使われ、さらにchatearのような新語を生み出したり、ratónのようにカスティーリャ語の訳語が用いられたり[26]、その定着の仕方は様々である。言語の規範を遵守すべきと考える立場の人々の目には、コンピュータ用語やネット用語に見られるanglicismoの氾濫は非常に好ましくない現象として映るであろうが、一度そのような用語が定着してしまうと代替語はネットユーザーには容易に受け入れられないものである[27]。

言語アカデミアはその立場上、新語や外来語を自らの辞書に採用することに関しては言語の専門家たちの中でも最も慎重な態度を取るが、それでも最近の辞書に新たに追加される語彙の中にこの種の用語が増えている。コンピュータやネットが関わる世界は進歩が非常に早いので、その進歩に追いつくことを意図する人々にとって時流に遅れがちなテンポで示される規範的表現というのは大して重要性を持たないであろう。

また、英語以外の言語起源の語彙もインターネットのおかげでこれまでよりも早いスピードでカスティーリャ語に借用される時代になった。前章で、近年の移民の急増が多言語国家スペインの言語事情をさらに複雑なものにしていることに言及したが、ネットの普及により移民たちの言語に由来する語彙や表現が流入したり、移民たち同士が情報交換をしたりすることが容易になっただけではなく、出身国にいる親族や仲間と連絡が密に取れるようになったことにより、自らの習慣風習を外国であるスペインにいても維持しやすくなった。

そして、コンピュータを使いこなし、ネットにアクセスするのは比較的

若い世代が多いため、この分野の言語事情の把握は今どきの若者の言葉遣いの傾向を知ることにつながる。もちろん、ユーザーには年長者もいるので、コンピュータやネットの用語の使用は若者言葉の実態と必ずしも直結するわけではないが、ネットの世界に親しんでいる人々は相対的に若い世代が多いという点ではスペインも世界の他の国々と同様である。

そして、近年ネットで主として若年層のユーザー間で使用される言葉の中で元の言語とは相当逸脱した形式が生み出されるという現象が、まず英語圏で広まり、続いて他の言語圏にも同じ現象が波及するようになった。

これはネットや携帯電話のSMSのユーザーによる省略文字使用であり、近年ネット社会では流行していて今のところその使用が下火になりそうな気配は見られない。まともな単語とは認知し難いこれらの「語彙」は誰でもすぐに理解できるものでないがゆえに、大勢の人々にその使用が支持されない限り、このような新語がカスティーリャ語の姿を劇的に変えていくとは思えないという見解を江澤(2004：195)は示し、その見解は現在も変わらないが、チャットやフォーラムの世界ではこの省略文字はかなり頻繁に見られるし、テレビ番組の本番中に番組に反応した視聴者から送られたメッセージが随時テロップとして流れる時にも、メッセージとして送れる字数が限られているだけにこの種の省略文字がよく使われている[28)]。ネット用の省略文字は今後もあらゆる世代の大半が使うようになるわけではないと思われるが、テレビの画面にさえこの種の文字表現が登場するようになったことにより、一般の人々がこれらを許容するかどうかはともかくとして、少なくともこれらの文字の存在に対する認知度は上がっていることは間違いない。

この種の文字や他の言語的逸脱表現が氾濫するスペイン語のチャットの世界で使われる表現やその形式については、Aberasturi y Salceda(2003)やLópez Quero(2003)が詳しい。Aberasturi y Salceda(2003)の著者は共に若者世代よりは年長であるが、チャットの世界に通じていて、実際のチャットの文例を随時引用して、スペイン語のチャットの世界の実際の姿を読者に示し、言語学的な分析をおこなっている。本論に入る前に著者たちから読者への注意書きを添え、用例に正書法上の問題や誤用があっても大目に見るよう忠告を与えたり、英語起源の語彙も通常よく行われるようなカッコ書きや字体変更せずにそのまま使用することについての断り書きを入れている[29)]。ネットの世界では独特のローカルルールが存在するが、さらに

チャットの世界では迅速な返答が求められるため、誤用や簡略化に寛容な態度を持たないとコミュニケーションを持続するのに支障をきたしてしまうのである。従って、チャットの世界になじんだ人ならば、世代を問わず多少の言語的逸脱には寛容になる。言語規範に縛られることを望まず自由に言葉をあやつりたい人にとって、ネットはかなり魅力的な世界である。

López Quero(2003)もチャットの言語機能について詳細な分析をおこなっている。本書は副題が“Aspectos gramaticales”となっているが、チャットそれ自体が持つ性格上、単に形態論やシンタクス面からの記述にとどまらない。例えば、pues や pero, bueno などの談話標識について言及があったり、特定の音や単語を繰り返したり、文字の大きさを変えたり、絵文字を使用することで生み出される文体効果について述べている。チャットではこのように音声・音韻、文体論、言語外情報なども関与するため、その談話分析は従来のテクスト分析とは異質の要素が介入してくる。

ネットの世界は日進月歩であるため、今後もどのような言語上の展開が待ち受けているのか予想しにくいが、世界中の人間の双方向通信を可能にした世界であるがゆえに今後も新語や規範を大きく逸脱した語彙がネットの世界から生産されることが予想される。

4．カスティーリャ語の行方

本稿では言語の規範に必ずしも通じていないスペインの一般人のカスティーリャ語話者の言語生活の多様性とカスティーリャ語の将来の可能性について、最近10数年ぐらいの間に国内の社会変化から生じた種々の言語現象を考慮に入れながら概観した。

急増した移民は社会問題を引き起こしながらも同時に新語を生み出す源泉となった。また、国内のバイリンガル地域の言語正常化運動の高まりにより、カスティーリャ語にも地方語からの言語的影響が徐々にではあるが現れている。

しかし、移民の社会的身分はまだ不安定であるし、国籍や言語、宗教さえ様々である彼らがスペイン社会に及ぼす影響の程度は容易には測りがたい。地方語に関しても事情は同様で、青少年に対する地方語教育は順調に進んでいるが、全国的にはマイナー、その地域でのみメジャーという地方語の特殊性のためか、地方語話者の言語選択は言語使用時の状況に左右さ

れる。また、カスティーリャ語モノリンガル地域では一部の地方語の語彙は認知されているものの、地方語がカスティーリャ語に及ぼした影響については、バイリンガル地域での事情ほどには明白な形では見えてこない。移民問題や地方語の問題とカスティーリャ語の関係については、今後も現地の最新情報の収集を続け、あまり明確な結論が出なかった部分の解明に努めたい。

規範を逸脱した表現については、とかく規範を無視した言葉を生み出すと批判されることの多い若者の言葉に注目することでその実態を知ることができる。彼らの言葉はその短命さとSMS用の省略文字に代表されるような規範からの甚だしい逸脱が目立ち、そのために記述に価しないと判断されがちであり、その研究はまだ十分に行われているとは言い難い。

若者言葉と使用範囲が重なる部分も多いネット用語も最初は主としてanglicismoの語彙が注目されたが、最近はチャットの言語という特殊な談話の分析が始まっている。これも今後の研究の行方に注目する必要がある。

本稿で取り上げたいずれの問題も1990年代以前にはそれ自体は存在していたがあまり多くの注目を集めていなかったテーマである。これらはスペインの社会の変化と共に生じたものであるので、その分析には社会言語学的な観点からの考察が必要不可欠である。

一般の人々は言語規範から逸脱した表現を日常生活で用いることが多いが、その中には特に若い世代が生み出すような意図的な表現もあれば、多少なりとも知識を持っている人でさえ犯しがちな、偶発的に発生する表現もある。さらに移民の急増や地方語復権という社会の変化にも影響されて、カスティーリャ語の話者はカスティーリャ語以外の世界から入り込んでくる新しい表現やそれを使う人々に対する態度を変えているように見える。

NOTA

1) 本稿で述べる「外来語」とはカスティーリャ語以外のスペイン国内外の言語に由来し、カスティーリャ語に借用された語彙または表現を指す。以後、特に断りを入れない限り、カッコ抜きでこの用語を使用する。

2) 中南米のカスティーリャ語はスペインのカスティーリャ語の「方言」ではないが、Grosschmid y Echegoyen(1998)のような、カスティーリャ語圏の中での地域限定用法という意味でのregionalismoという用語の使用は妥当であると

筆者は考える。

3）参考URLアドレス①を参照。

4）移民文化の受容を思わせる動きの一例としては、近年来のアルゼンチン映画のブームである。映画のチラシに映画の中で使用される主なargentinismoが掲載されている場合もあった。(Juan José Campanella監督　1999年の作品"El mismo amor, la misma lluvia")また、移民に対するネガティブな見方を象徴する例としては、sudacaのような南米人に対する軽い軽蔑の念がこもった表現が以前より文章等で見られるようになったことである。この表現は移民が増加する前からスペインで使用されていて、sudamericanoの省略形と言われている。

5）記事のデータによると、モロッコ人や他のアフリカ諸国からの移民の子供より中南米の国々(特にコロンビア、エクアドル)からの移民の子供のほうが数が多い。

6）江澤(2004)を参照。

7）1つの映画館で複数の作品を上映しているところが大半なので、映画館の数は二言語での上映数を比較する際の判断材料にはならない。また、Versión originalの作品についてはカスティーリャ語、カタルーニャ語のいずれかで字幕がつくため、これもそれぞれ計上した。ただし、新聞の映画欄には必ずしもこの言語情報が明示されていない映画館もあり、279本という本稿の数値は若干の誤差を含みうる。

8）El Periódico de Catalunya 2004年5月30日付の記事によると、カタルーニャ語版の翻訳本はカスティーリャ語版の翻訳本よりも平均で1.4ユーロ価格が高く、最近の話題作でカスティーリャ語版しか存在しない作家の作品については、その70%が過去の作品でカタルーニャ語に翻訳されているとのこと。すなわち、これはカタルーニャ語への翻訳が近年減少していることを意味する。

9）筆者が近年訪問した地方語圏(カタルーニャ、ガリシア、バスク、バレンシア)のいずれにおいても、日本の"Shin Chan",(クレヨンしんちゃん)や"Doraemon"(ドラえもん)などの地方語版アニメが放映されていた。

10）江澤(1999：199及び205－206)を参照。

11）2002年にガリシア沖タンカー座礁事件が起こった時、当時の報道でしばしば使用されたchapapoteは新語のように思われたが、後日、ガリシアではカスティーリャ語のalquitrán, asfaltoに相当する語として使われているとの情報を得た。そして実際、ガリシア語の辞書にもこの語が掲載されているのを確認した。後日、この語の由来を考察したLópez Medel氏の文章をウエブページ(→参考URLアドレス②)で発見したが、この語は同氏によると"una palabra que *suena* distinto. Tiene algo especial, algo exótico."という印象をこの語を知らないカスティーリャ語話者に与えるようである。

12) ロマンス語系の言語ではないバスク語がカスティーリャ語に与えた統語上の影響についてはLechuga Quijada(1996)では一例も指摘されていない。

13) Lechuga Quijada(1996：70－73)を参照。例えば、Las hay de mejores. カタルーニャ語ではこのdeに相当する表現がよく使われるが、カスティーリャ語には存在しないとのこと。quitarse el sombreroをsacarse el sombreroと表現することなど。

14) カタルーニャ語を母語とする子供のうち、家庭で主にカタルーニャ語を使うと答えたのは約40%である。この数値は参照した記事には棒グラフで示されていただけで、正確な数字は記事中には出てこないが、主にカスティーリャ語を使うと回答した生徒よりもやや少ないことがグラフより観察される。

15) 知人の話だけでなく、カタルーニャ語を話せる外国人が同様の経験をしていることについては幾度か書物などでも読んだことがある。カタルーニャ人は相手が外国人だとわかった瞬間に相手への使用言語を無意識のうちにカスティーリャ語に切り替えてしまうが、それは何らかの悪意からおこなった行為ではなく、カタルーニャ語使用を公に禁止された時代を経験した人にとって習慣的なものになっているとのことである。

16) Gómez Torrego(1999：2130)によると、dequeísmoは最近生じたという説もあるが、古い例は*Lazarillo de Tormes*の中にも見つけられ、その起源を突き止めるのは容易なことではない。

17) Gómez Torrego(1999：2127, 2130)を参照。

18) Rozalén y Calvo(1999：57)掲載の1994年9月1日の用例。

19) Rozalén y Calvo(1999：111)掲載の1994年5月15日の用例。

20) Rozalén y Calvo(1999：135)掲載の1993年8月13日の用例。

21) Rozalén y Calvo(1999：140)掲載の1993年8月7日の用例。

22) Rozalén y Calvo(1999：194)掲載の1995年1月9日の用例。

23) Rozalén y Calvo(1999：202)掲載の1995年7月11日の用例。

24) Rozalén y Calvo(1999：209)掲載の1994年1月4日の用例。

25) Vigara Tauste(2002：226)を参照。特にpijaに顕著な用法で、pedoをpun, ¡joder!を¡jo!と言い換えるなど表現を緩和しようとする傾向がある。

26) インターネット用語に詳しいJosé Millán氏のウエブサイト(→BIBLIOGRAFÍA参照)のratónの項によると、イスパノアメリカの中にはratónという訳語を使わず、英語のmouseをそのまま使用する地域がある。

27) Millán(2001：176－177)もこの問題については、hardwareなど適切な代替語が見つからない場合は英語の借用語をそのまま使用することを容認できるが、代替語で間に合う場合にまで英語を使うのはよくないという見解を表明している。

28) 筆者がスペインで視聴したその種の番組は大衆向けで、内容から判断する

と主要な視聴者層は比較的若い世代か、俗っぽいものを好む年長者である。スペインの新聞記事などではこの種の番組がtelebasuraという軽蔑の意味をこめた造語で総称されることも少なくない。

29) Aberasturi y Salceda(2003：7)を参照。

BIBLIOGRAFÍA

Aberasturi, Andrés y Pura Salceda(2003) *Hol@, de dónde eres? Manual de urgencia para navegar en los ch@ts*, Ediciones B, Barcelona.

Bosque, I. y V. Demonte, (dir.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*, 3 tomos, Editorial Espasa Calpe, S.A., Madrid.

Doval, Gregorio (1996) *Diccionario de expresiones extranjeras*, Ediciones del Prado, Madrid.

江澤照美(1999) 「外来語とスペインの地方語の使用について」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第31号、193－208.

――(2004) 「現代カスティーリャ語と規範」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第36号、179－200.

Fernández-Ordóñez, Inés(1999) "Leísmo, laísmo y loísmo" en Bosque, I. y V. Demonte (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*, tomo I－21, Gredos, Madrid, 1317－1397.

Gómez Torrego, Leonardo(1999) "La variación en las subordinadas sustantivas: dequeísmo y queísmo" en Bosque, I. y V. Demonte(dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*, tomo II－34, Gredos, Madrid, 2105－2148.

Grosschmid, Pablo y Cristina Echegoyen (1998) *Diccionario de regionalismos de la lengua española,* Editorial Juventud, S.A., Barcelona.

Lechuga Quijada, Sergio (1996) *Castellanopatías Enfermedades del castellano de fin de siglo (Con un Diccionario de lo que no hay que decir)*, Ediciones Universidad de Navarra, S.A., Pamplona.

López Quero, Salvador (2003) *El lenguaje de los 'chats' Aspectos gramaticales*, Port-Royal Ediciones, Granada.

Millán, José Antonio (2001) *Internet y el español, Fundación Retevisión*, Madrid.

Rodríguez, Félix (coor.) (2002) *El lenguaje de los jóvenes*, Ariel, Barcelona.

Rozalén, José Luis y Agustín Calvo (1999) *¡A golpes con la lengua!: Más de diez años de fallos lingüísticos*, Ediciones del Laberinto, S.L., Madrid.

Vigara Tauste, Ana M.ª(2002) "Cultura y estilo de los "niños bien": radiografía del lenguaje pijo" en Rodríguez, F. (coor.) *El lenguaje de los jóvenes*, Ariel,

Barcelona, 195－242.

Zimmermann, Klaus (2002) "La variedad juvenil y la interacción verbal entre jóvenes" en Rodríguez, F. (coor.) *El lenguaje de los jóvenes*, Ariel, Barcelona, 137－163.

新聞記事

El País (23 de agosto de 2004) "Las madres extranjeras han dado a luz más de 214.000 bebés en ocho años"

El Periódico de Catalunya [versión castellana] (30 de mayo de 2004) "El lujo de leer en catalán --- Cae el número de libros traducidos al catalán, más caros que los vertidos al castellano"

La Vanguardia (4 de junio de 2003) "Los escolares juegan en castellano --- El 60% de los alumnos de primaria en Catalunya habla en castellano en el patio"

—(8 de septiembre de 2004) Cartelera (映画紹介欄)

参考 URL アドレス

① http : //eltiempo.terra.com.co/inte/COLOMBESP/COLESP_GUIA/guia/ARTICULO-WEB-_NOTA_INTERIOR-1183953. html

Montoya Echeverry, Ramiro "Diccionario del español actual en Madrid, 'Madrileño urgente para colombianos'" en *Colombianos en España* (3 de septiembre de 2003), [El Tiempo.com の国際面(Internacional)]

② http : //www.ucm.es/info/especulo/cajetin/chapap 2. html

López Medal, Pablo "Chapapote" en *El cajetín de la lengua* (revisado, 6/03/2003), [Ana Mª Vigara Tauste 氏のサイト]

③ http : //jamillan.com/v_index.htm

Millán, José Antonio "Vocabulario de ordenadores e Internet" en *Página personal de José Antonio Millán*

La sociedad de España y sus lenguas — el castellano actual de hoy

EZAWA Terumi

En la década de los 90 se produjo un gran cambio en la sociedad española. Dicho cambio tuvo una gran influencia en la situación de las lenguas del país. Hoy en día aumenta la llegada de inmigrantes africanos, árabes, asiáticos y latinoamericanos. Asimismo las comunidades autónomas han promovido la normalización de las lenguas autóctonas en las regiones bilingües.

Con estos cambios sociales los españoles han incorporado los extranjerismos y regionalismos importados por las lenguas de los inmigrantes. Y también las lenguas vernáculas han incorporado su léxico típico en el castellano. Por eso sería evidente que estas situaciones han enriquecido el mundo de la lengua castellana, sin embargo, las variedades lingüísticas hacen aumentar las expresiones desviadas de las normas de la lengua.

Los castellanohablantes comunes tienden a emplear la lengua sin atender al cuidado con sus normas. Sobre todo, los jóvenes quieren usar neologismos y vulgarismos, incluso llegando a inventar e incluir en su habla el léxico original de SMS que está muy de moda entre ellos. Esa tendencia a la invención ha venido del mundo inglés. Y los jóvenes emplean los préstamos abreviados muchas veces en SMS, chat, foros, tableros de mensajes, etc.

Así es la realidad del castellano y sus usuarios, los cuales la aceptan unas veces y la rechazan otras veces. Por eso, es necesario analizar sus actitudes ante el cambio de la lengua desde el punto de vista sociolingüístico.